

宣教師シドティの日本語学習と日本語力

カロリーナ・カパッソ

〈要旨〉

イタリア人宣教師ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティ (1667–1714) は、宝永5年日本に密航潜入した。屋久島に上陸後囚われ尋問を受けたが、役人はシドティの言葉が分からず、すぐに長崎に護送した。長崎奉行所でもやはり言葉が通じず、阿蘭陀通詞および阿蘭陀商館長も「何国語ともつかぬ言葉」を喋ると述べている。

その後、江戸で新井白石によって尋問が行われたが、白石は「其問ふ所に答ふる所をきくに、かねておもひはかりしごとくに、事わづらはしからず」と言っている。さらに、その尋問から得られた情報をもとに、白石が『西洋紀聞』を書いていることを考えれば、少なくとも江戸において、シドティの口にした日本語は決して意味不明なものではなかったはずである。

当論文の目的は、シドティが話していた言葉について、可能な限り明らかにすることにある。第一章では、母国イタリアにおける、日本語（および日本についての知識）学習の契機と方法およびその範囲内容とを扱う。そのために、16・17世紀を通して日本についてどのような書籍がどれほど出版されたのかを整理して、シドティが日本語学習に使用した可能性が高い書籍を特定する。そして第二章では、彼が日本に持参していたであろう書籍を分析することによって、彼の日本語学習と知識が実際にはどのようなものでありえたかを究明したい。

キーワード：シドティ、キリシタン史、近世史、宣教師と言語、西洋紀聞

〈Summary〉

The Italian missionary Giovanni Battista Sidoti (1667–1714) stowawayed in 1708 to spread Christianity in Japan. However, he was imprisoned after landing on Yakushima and was cross-examined, but the officials did not understand his words and immediately escorted him to Nagasaki. Although the investigation started at the Nagasaki magistrate's office, his words were still unclear, and both the Dutch interpreters and the Dutch of the factory in Dejima said that “they are words that could not be spoken in any language.” After that, an interrogation was conducted by Arai Hakuseki (1657–1725) in Edo, and he said, “I can understand his Japanese more than I expected.” Furthermore, considering that Hakuseki wrote “*Seiyō Kibun*” based on the information obtained from the missionary, the Japanese spoken by Sidoti, at least in Edo, was not unclear.

The purpose of this paper is to clarify as much as possible the language Sidoti was speaking.

Chapter 1 deals with the opportunity and method of acquiring knowledge about Japan in his native Italy, and its scope. To that end, we will sort out what kind of and how many books were published about Japan throughout the 16th and 17th centuries, and identify the books that Sidoti is likely to have used for learning Japanese. In chapter 2, I would like to consider the content of his Japanese learning and knowledge by analyzing the books that he brought to Japan.

Keywords: Sidoti, Christianity in Japan, Early Modern Period, Missionary Linguistic, Seiyō Kibun

はじめに

ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティ Giovanni Battista Sidoti¹⁾は、1667年8月22日にイタリア・パレルモで生まれた。1684年に神学生となり、1689年にイエズス会の学院で哲学と神学の学位を取得した²⁾。1693年以前にローマに移り、教皇インノケンティウス12世 Innocentius XII (1615–1700) の前で演説を行い³⁾、ドミニコ会員トンマーズ・マリア・フェラーリ Tommaso Maria Ferrari 枢機卿 (1649–1716) の法律聴取官を務めた。

教皇クレメンス11世 Clemens XI (1649–1721) が、中国の典礼問題を解決するために、アンティオキア総大司教シャルル・トマ・マヤール・ド・トゥルノン Charles Thomas Maillard de Tournon (1668–1710)⁴⁾ を使節として派遣することになった時、シドティは布教再開のため日本への派遣の許可を申請した⁵⁾。その後、シドティはド・トゥルノン使節団の一員となって⁶⁾、1702年7月4日にローマを出発し⁷⁾、ジェノヴァ、スペイン、カナリア諸島、インドを経由して、1704年9月22日⁸⁾、使節団はマニラに到着した。シドティはマニラに4年間滞在し、様々な活動に従事している⁹⁾。

シドティはマニラから日本への渡航を計三度¹⁰⁾ 試みたが、第三回目にようやく成功し、1708年8月25日¹¹⁾に出発、一か月余り後 (1708年10月11日) に日本・屋久島に上陸する。そしてすぐに捕らえられ、尋問を受けた。

『長崎注進邏馬人事』¹²⁾によれば、屋久島の役人はシドティの言葉が分からず、彼が口にした「ろうま、なんばん、ろくそん、かすていら、きりしたん」等の言葉が長崎奉行所へ報告された。長崎奉行はすぐに阿蘭陀人を呼び、阿蘭陀通詞を通じて、その言葉等について尋ねたが、「ろうまと申す事、南蛮国いたりや之内」から来たものらしい事が分かった程度であった。その後、シドティは長崎に護送され、直接長崎奉行所で取り調べが始まったが、やはり言葉が通じず、阿蘭陀通詞たちも阿蘭陀商館長らも「何国語ともつかぬ言葉」¹³⁾と述べている。幸いなことに、補助員アドリアン・ダウ Adriaen Douw がラテン語を少し理解したため、このアドリアン・ダウのラテン語を頼りに、手探りながら尋問が行われた。

このシドティの日本語能力や言語コミュニケーション問題について本格的に取り組んだ先行研究は少なく、簡単に触れる程度にとどまっている。

宮崎道生 (1968)¹⁴⁾は白石について「シドチの自然科学的知識には素直にカプトをぬぎ、またその人格についても讃辞を惜しんでいないので、水戸の安積澹泊に向かって、『暹羅人に度々出会候事、凡そ一生の奇会たるべく候』ともらした位である」と述べており、シドティの知識について彼が目としたのは、日本についての知識や日本語ではなく、シドティを通して得られたヨーロッパの知や学問に限られている。

松田毅一 (1978)¹⁵⁾によって、ヨーロッパ各地に埋もれていたシドティに関する文献が発見されているが、残念ながら、彼の研究の対象がシドティにあてられたのはわずかであった。そして、シドティの日本についての知識・日本語力についての言及は「オランダ商館や唐館の協力を得ても、シドッチが口にするイタリア語やスペイン語を解する者はいなかった」の他一切見られない。

片桐一男 (1994)¹⁶⁾は、阿蘭陀通詞の研究において、シドティ事件、そしてそれに関わった阿蘭陀商人および阿蘭陀通詞について何度も扱っている。氏の分析は精緻で綿密なものであるが、あくまで大通詞今村源右衛門と白石の言説の分析に終始しており、それを可能にさせたシドティの知識・彼の語学力にまでは焦点を当てておらず、「シドッチは日本語に自信ありげであったが、なんとも通じなかった」としか述べていない。

マリオ・トルチヴィア Mario Torcivia (2019)¹⁷⁾は「シドティが宣教師として派遣が正式になる前にあらかじめ勉強をしていた(中略)マニラで暮らした4年間には、マニラ在住の多くの日本人と出会うことができたので、文化を知り、言語を勉強したのは確かである」と述べ、イタリアおよびマニラでのシドティの日本語との接触について言及しているにもかかわらず、その根拠となる史料は一切提示されていない。

以上の先行研究では、江戸に送られるまでの尋問については、言語コミュニケーションの困難さが指摘されるだけで、シドティが口にしてきた言葉が、何故通じなかったのかなどについては触れられていない。

だが新井白石の言葉を信じるならば、言語コミュニケーションは十分に成立している。白石の尋問はラテン語と日本語で行われたが、最初の尋問から白石は「其問ふ所に答ふる所をきくに、かねておもひはかりしごとくに、事わづらはしからず」と記録している。さらに、その尋問から得られた情報をもとに、白石が『西洋紀聞』を書いていることを考えれば、少なくとも江戸において、シドティの口にした日本語は決して意味不明なものではなかったはずである。

また、シドティは尋問の中で、渡日以前から日本語を学習をしていたと述べている。『西洋紀聞』¹⁸⁾下巻によれば、シドティは自分の立場と航海経路について問われた際に、次のように答えている。

ローマンにありて、サチェルドスに至り¹⁹⁾、六年前に、一国の薦挙によりて、メッシヨナリウスになされたりき。(中略)初、本師の命をうけて、此土に来るべき事承りしよりして、此土の風俗を訪ひ、言語を学ぶこと三年。(中略)またロクソンに至りとどまれる時に、此国の人にあひて、訪ひ学びし事もありきといふ。

つまり「メッショナリウス」に任命される六年前から日本語の学習を始め、ローマで三年、そして、マニラに滞在期間中の三年（実際には四年）の計六年（七年）、日本語を含め日本について勉強したということになる。

以上の観点から本研究においては、シドティの日本語および日本についての知識・理解がどのようなものであったかを明らかにすることを目的とする。

第一章 イタリアにおけるシドティの日本語学習

上記のように、『出島蘭館日誌』には、シドティの話す言葉が「何国語ともつかぬ言葉」²⁰⁾と記されていた。報告を読んだ新井白石は疑問を抱いて、「我国にもとむる事ありて来らむものゝ、其ことばに通ぜざらむには、何ゝよりてか、其志をもとげ候へき」²¹⁾と述べている。つまり、何らかの目的で外国に行くことと決めた場合は、その国の言葉を覚えなければ目的を達成することが出来ないと考えるのは常識だというのが、シドティの目的は当然ながらキリスト教の布教再開だが、そのためにはまず「江戸へ参申度と申候儀は、江戸にて宗門を弘め申度志にて候故奉ずレ願候」²²⁾と決めている。従って、日本語力がなければ、その目的は達成できないと考えるのは当然で、まして「長崎之儀ハ、阿蘭陀人罷在候段承及申候。本国にては、敵国に而御座候」²³⁾とあるように、オランダ人を介してではなく、直接日本人と交渉するつもりであった。シドティの日本語力の現実がどのようなものであったかは別として、彼が入国以前に日本語を学習していたことは確かであり、その開始時期がいつであったかは、きわめて重要な問題である。

第一節 日本語学習の契機——いつ・どこで日本について学習し始めたのか？

宝永5年（1708）11月の長崎での尋問と、宝永6年（1709）12月の江戸での白石による尋問における「六年前に（中略）本師の命をうけて、此土（日本）に来るべき事を承りしよりして、此土の風俗を訪ひ」²⁴⁾という言葉に従えば、シドティは日本への派遣が決定してから日本語の学習を開始している。日本への派遣が正式に決まったのが1701年12月30日²⁵⁾で、ローマを去ったのが翌1702年7月4日であるため、学習開始時期については、以下の仮説を立てることができる。

仮説1：長崎での尋問の六年前

仮説2：江戸での尋問の六年前

仮説3：六年前ではない

仮説1から見てみたい。長崎での尋問は、宝永5年11月9日から同年同月20日（1708年12月20日～31日）の5回にわたって行われた²⁶⁾。この時の尋問を基準にすれば「六年前」は1702年で、イタリア出発の直前になる。

次に、江戸の尋問の「六年前」とする仮説2を見てみよう。江戸での尋問は宝永6年11月22日

から同年12月4日まで4回に渡って行われた²⁷⁾(西暦では1709年12月22日から1710年1月3日まで)。この尋問を基準にすれば、「六年前」は1703年で、既にイタリアを出港して渡航中となる。仮説1, 2のいずれも、日本語学習を始めるには難しい状況に思われる。

そこで、そもそも「六年前」ではなかったという仮説3を考えてみたい。通訳を介した困難な尋問であったことを踏まえ、「六年前」というのが誤訳であった可能性を検討してみたい。

通詞達にラテン語を教えるよう長崎奉行らに要請された商館長ヤスペル・ファン・マンズダール *Jasper van Mansdale* は、1708年12月22日付の商館日誌に次のように書いている。「奉行達の命により大通詞ゲンネモン²⁸⁾と2人の稽古通詞(加福喜七郎, 品川兵次郎)と更に2人の日本人に我々の商務員補アドリアン・ダウからラテン語を習得させたい。その目的で彼等は出島に通い続ける用意があると告げられた。その事に我々は反対はしなかったが、我々は、商務員補自身それ程(ラテン語が)堪能なわけではない。どの程度お役にたてるか疑問だと述べた²⁹⁾。オランダ人の商人たちがラテン語に通じていなかったのであれば、誤訳の可能性は否定できないと思われる。ラテン語の「六年前」は「(ante) sex annos」だが、前置詞が省略された形「sex annos」は、「六年間」(「(per) sex annos」)にも用いられるため、それを聞いたオランダ人アドリアン・ダウが取り違えた可能性が残される。

もしくは、シドティ自身、時の経過が分からなくなっていたため、「六年前」の基準点となる現在が曖昧になっている可能性も無視できない。事実、ローマからマニラまで共に旅をしたド・トゥルノン使節団の団員2名、フランチェスコ・サンジョルジョ *Francesco San Giorgio* とジュセッペ・コルデロ *Giuseppe Cordero* の中国入りについては、それぞれ南京と広東に10年滞在しているとシドティは言っている³⁰⁾が、実際は1705年4月1日に清国に上陸して³¹⁾、シドティの尋問からわずか4年しかたっていない。

しかし、シドティは「六年前に(中略)本師の命をうけて、此土(日本)に来るべき事を承りしよりして、此土の風俗を訪ひ、言語を学ぶことに三年」と述べていて、その三年間がイタリアを出発する前の、ローマでの学習期間だけに言及していたとするなら、日本への派遣が正式に決定する以前から、シドティは日本について学び始めていた可能性が高い。

あるいは、言語を学んだその「三年間」は、中継地マニラでの学習期間を含んでいるのだろうか。シドティは確かにマニラでも日本語の学習をしているが、マニラ滞在はそれよりも長い四年間(1704年9月～1708年9月)であり、その期間の違いをどう考えればよいのか。

ここで目を外に向けて、日本以外の史料を参照してみたい。阿蘭陀東インド会社に勤めたフランソワ・バレンティン *François Valentijn* は帰国後、『旧・新東インド史³²⁾』を執筆するために東インド会社の文書館を訪れ、長崎でのシドティの取り調べを細かく記録している。その記録によれば、いつから日本に来る予定だったのかと聞かれたシドティは、次のように答えている。「若い時から準備をしていました。教皇(クレメンス11世)が私をここに派遣する日まで、ローマで見つけた古い本の助けを借りて日本語の勉強を続けていました³³⁾」。

シドティのいう「若い時から」が具体的にいつのことかは不明だが、日本に潜入した時に既に

41歳³⁴⁾、マニラに着いたのは37歳³⁵⁾で、この時期は「若い時」には該当しないと思われる。続いて、ローマに移ったのは恐らく22～25歳³⁶⁾であったとされ、このローマ滞在初期およびそれ以前のシチリア滞在期こそが「若い時」であったと考えるのが自然であろう。ここでは先ず彼が神学生であった時代を視野に入れて考えてみたい。シドティはパレルモのイエズス会コレジヨ・マッシモ Collegio Massimo 学院で神学・哲学の学位を修得しているため、日本での宣教についての情報はその時に得られたのではないだろうか。

この当時、神学校等の食堂で食事の神学生に神の言葉（聖書等）や聖人伝等を読み聞かせることが習慣的に行われていたが、イエズス会の学校では、創立者イグナティウス・デ・ロヨラ Ignatius de Loyola および聖フランシスコ・ザビエル Franciscus Xaverius の伝記や、世界中で行われていた宣教活動の成果と異教の地での布教の偉業が紹介されていた。シドティが日本における布教について初めて知ったのは、この時期であった可能性が高い。

そして、当時イエズス会には、「リッテラエ・インディペタエ *Litterae Indipetae*」³⁷⁾という、極東への派遣について神学生や若手の神父などからイエズス会長に請願書を送るという習慣があった。現在分かっている限りで、1687～1730年の間、シチリア島から送られた請願書は579通にも上っている³⁸⁾。請願書には、適切な年齢と健康な体であることや、外国語の知識、勉強の段階、特技等³⁹⁾が細かく書かれていた。この「リッテラエ」は、地域の管区長による厳選を経てローマに送られたため、ローマのイエズス会総長のもとに届いた請願書はわずかであったとされている。従って、請願者の中には、書面による手段が効果的ではないと考え、申し立てのためにローマに出向き直接総長に嘆願する者もいた⁴⁰⁾。シドティがパレルモのイエズス会学校で学んだ後ローマに向かったのは、このように、日本に派遣される機会を求めてのことであった可能性も否定できない。

先述のように、シドティは1689年末から1692年末の間にローマに移り、教会法と市民法を学び、学位を取得している⁴¹⁾。更に、1695年に枢機卿に就任したドミニコ会士フェッラーリの聴取官を勤めた⁴²⁾。フェッラーリ枢機卿は、1701年からキリスト教と中国典札との互換性について決着をつけるべく結成された委員会のメンバーであった⁴³⁾。教皇の側近の人物であったフェッラーリ枢機卿の尽力によって、中国に派遣されるデ・トゥルノンの使節団の一員にシドティが選出されたと思われる。

いずれにせよ、日本への派遣が正式に決定する以前から、シドティは日本語を学び始めていた可能性が高い。そうであれば、「六年前から」ではなく「六年間」、つまりパレルモ（シチリア）時代か、あるいはその後のローマ滞在時とマニラ滞在中の学習期間を合計したのが「六年」であるという解釈も成立する。

尋問の様子を想像してみよう。シドティが質問にラテン語で答えて、その答を聞いたダウがオランダ語でメモを取ったとするのが自然であろう。そしてダウはそのメモを片手に、今村源右衛門と一緒に日本語に訳した。このような通訳の過程を考えれば、シドティの答に近いのは、二重翻訳を経た日本語の史料ではなく、その基となったオランダ語であると思われる。したがって、

この場合はオランダ語の資料に依拠すべきであろう。更に、白石が主張しているように（「我国にもとむる事ありて来らむものゝ、其ことばに通ぜざらむには、何ゝよりてか、其志をもとげ候へき」）、日本で布教を目指すシドティが、日本語を全く知らないようでは、そもそも派遣の出願さえも出来かねない。つまり、シドティは彼自身が言っているように、派遣が正式に決定する以前から、既に日本についての知識収集や日本語の勉強を始めていたと考えられる。

第二節 日本語学習の方法 — シドティの活用した書籍

一. イエズス会による出版物

さて、シドティが17世紀後半のローマで、日本語を学習するに際してどのような書籍を活用したのかを考察する前に、まずは16世紀から17世紀にかけて、イエズス会によって出版された日本および日本語に関する書籍を確認しておきたい。

15世紀にヨハネス・グーテンベルク Johannes Gutenberg (1368頃–1468) によって発明された活版印刷技術は、ヨーロッパにおける書物の生産に大きな変革を起こした。それまでは手書きもしくは木版印刷によって、時間と多額の経費を必要としていた書物の生産は、活版印刷技術の発明によって大量生産が可能となり、安価な複製品となった書物は、とりわけ16世紀以降、急速に普及していった。1550年代には、西ヨーロッパで三百万以上の書物が出版されている⁴⁴⁾。活版印刷技術が発明されたのはドイツだったが、16世紀になると、ルネサンス文化の中心であったイタリア（特にヴェネツィアおよびローマ）が書物の生産の最も重要な中心地となった。

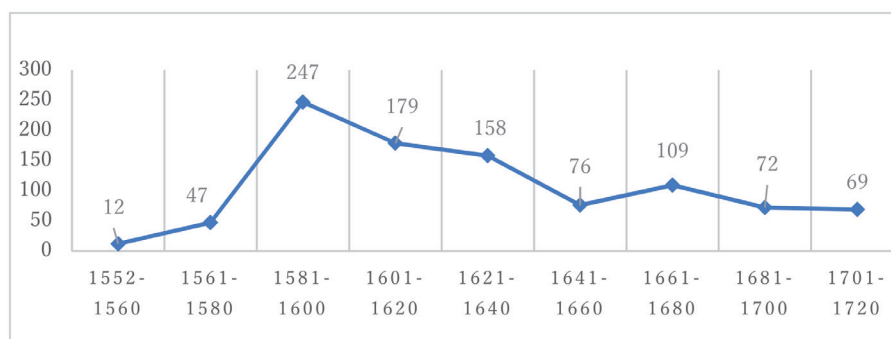
16世紀後半はまた、日本での布教活動に先駆けていたイエズス会員らが、日本からイエズス会本部に毎年沢山の書簡 (Epistolae/Lettere), 報告 (Relationes/Avvisi), 年報 (Annales/Annali) 等を送っていた時期でもある。イエズス会は、出版業界の隆盛を受けて、こうした日本からの報告を厳選し、日本の歴史・地理・文化・風俗はじめ、宣教活動の経過や成果に基づいた書籍を数多く出版している。それらの大半は、最初は主にイエズス会本部があるローマで出版されたが、後にヴェネツィア、フィレンツェ、ナポリ、ミラノなど各地の出版社が手掛けるようになり、そしてラテン語だけではなく、ヨーロッパの近代語に訳され、広く出回っていた。

また天正や慶長遣欧使節を契機として、一般のヨーロッパ人が初めて日本人を目にしたことで大きな反響を呼び、中には聖職者によるものだけではなく、一般の作者のものも見られる⁴⁵⁾。とりわけ天正遣欧使節は、ヨーロッパ各地に影響を残しただけでなく、渡欧の成果を日本にももたらし、中でも活版印刷機の導入は注目に値する。活版印刷機の導入を企画したのは、少年使節の派遣に一役買ったイエズス会司祭にして巡察師アレッシェンドロ・ヴァリニャーノ Alessandro Valignano (1539–1606) であった。ヴァリニャーノは、日本で言葉の壁に気付き、宣教師たちの日本語学習と日本人のラテン語学習の両方の必要性を痛感して、宣教活動の進展のためには、神学校で使用される教材や教理書などを短時間で大量に作成することのできる活版印刷機の重要性に思い至っている。ヴァリニャーノはインドのゴアまでしか同行しなかったが、日本の少年たちとその付添人のために印刷機を入手し、印刷技術を学ぼうと指示している。

そして、リスボンまたはローマで入手された印刷機は、ゴア、マカオを經由して、その10年後日本に到着し、1590年7月に初期のキリスト教布教の中心地の1つであった九州の加津佐コレジオに設置された⁴⁶⁾。その後まもなく天草島に移され、更に長崎に運ばれた。初期の印刷作業は、ポルトガルで活字の原型作りを学んだ日本人コンスタンチノ・ドゥラド Constantino Dourado (1567–1620) やイタリア人ジョヴァンニ・バッティスタ・ペシエ Giovanni Battista Pesce (1560–1626) などの指導の下で行われたが、後に日本人後藤宗印（洗礼名Thome 説明）や原田アントニオなどがキリシタン版の歴史において重要な役割を担っていく⁴⁷⁾。

日本におけるイエズス会の印刷活動は短命に終わった（1591–1611）が、「日本字やローマ字で毎日新しい書物が出来上がっている」⁴⁸⁾というヴァリニャーノの記述を考えると、その活動ぶりは盛んであった⁴⁹⁾。その後、日本のキリスト教徒への迫害が激化すると、印刷機はマカオに移され、キリシタン版の書籍の多くは、ローマにあるイエズス会本部や、宣教活動に協力や支援をしていた貴族らに送られ、一部は、宣教師自身や一般の信者が日本を後にした時に、国外に持ち出されたと考えられる⁵⁰⁾。イエズス会員で天正遣欧少年使節の通訳を務めた随員のディオゴ・デ・メスキータ Diogo de Mesquita 神父（1553–1614）によると、一冊の部数はおよそ1300~1500部であった⁵¹⁾。

イタリアはじめヨーロッパ各地で出版された日本に関する書籍と、イエズス会によるキリシタン版の既知の作品の数はグラフ1の通りである⁵²⁾。



グラフ1. 日本に関する書籍（ラウレスキリシタン文庫データベースの元に筆者作成）

こうした日本の歴史や文化に関する書籍は、イタリア中の神学校などのイエズス会施設に置かれた。従って、シドティはパレルモ学生時代に目にした可能性が高い。

一方、日本語の書籍となるとそもそも数が少なかったが、イタリアであれば、ローマのイエズス会本部および所属の図書館や神学校に置かれてあったと考えられる。果たしてシドティのようにイエズス会員ではない人物、まして当時極東への布教事業においてイエズス会と競合関係にあった布教聖省によって日本に派遣されようとしていた宣教師に、イエズス会の施設への出入りが許されたかどうかは疑問であるが、それらの書籍を布教聖省が設立当初（イエズス会との関係

が悪化する前)に宣教師たちの教育のためにすでに購入していたことも考えられる。従って、シドティが慶長8・9年(1603–04)長崎刊『日葡辞書』を使用していた可能性は否定できない。それを裏付けるように、シドティは長崎で、オランダ人に対して何度も「タバケッリ」⁵³⁾という言葉の口にしてしている。この言葉は『日葡辞書』で確認できるが、コリヤードCollado『羅西日辞書』には見当たらない。こうしたことから、シドティがローマで民間人及びイエズス会士によって出版された日本に関する書籍を、日本語学習のため使用した可能性は充分にあり得る。

二. 布教聖省が関わった出版物

1600年に教皇クレメンス8世は、勅書「オネローサ・パストラリス *Onerosa pastoralis*」⁵⁴⁾によって、托鉢修道会にも日本に行くことを許可した。しかし、日本での布教の独占を守ろうとしたイエズス会によって、後発の托鉢修道会の宣教師たちは様々な妨害に遭い、その対立を目撃した日本側はキリスト教への疑心を深めて、キリスト教追放の一因となった。

こうした状況の中、ドメニコ会のスペイン人宣教師ディエゴ・コリヤードDiego Collado⁵⁵⁾(1589–1641)は1619年、既にキリシタン禁止令が出されていた日本に潜入し、長崎・有馬などで密かに布教活動を続けた。1621年にはドミニコ会日本管区長代理を務め、同年、教皇庁から長崎の26殉教者の列福調査判事に任命され、報告書をまとめた後、1623年にローマに戻った。

コリヤードは、日本での迫害の一因に、イエズス会による長年の日本布教の独占を挙げ、布教聖省の後援を受けて、1624年に日本イエズス会に対する告訴状(「ソテロ陳状」)を提出した。そして1632年には、宣教活動への支持を築くこと、また新たな宣教師を教育することを目的として、布教聖省の支援を得て、『日本文典』『羅西日辞書』『懺悔録』を刊行した。

1. 『日本文典』 *Ars Grammaticae Iaponicae Linguae*⁵⁶⁾

同書は、ラテン語で書かれた日本語の文法書である。最初はスペイン語で書かれたが、スペイン人の宣教師だけでなく、すべての国籍の宣教師を対象とすることを目的として、布教聖省の依頼でラテン語に訳された。特徴としては、モデルとされたロドリゲス⁵⁷⁾の文典に対して、コリヤードの説明は「簡潔」⁵⁸⁾で、わずか75枚の小冊子となっている。更に読者への序文で「ロドリゲスの日本語文典が入手困難な経路にあるから」という記述が見られ、その補完を目的として布教聖省より依頼された経緯が述べられている。この文典をシドティが日本語の学習に使用した可能性はきわめて高い。

2. 『懺悔録』 *Niffon no cotoba ni yo confesion*⁵⁹⁾

『懺悔録』は、日本人信徒の懺悔(告解、ゆるしの秘跡)を日本語(ローマ字表記)とラテン語で記したもので、信徒の生活や風俗習慣をうかがい知ることができるマニュアルである。序文には、同書の目的が説明されている。彼の『日本文典』がローマで印刷されたとき、文法の規則が適用されるよう、より実践的な説明を追加するように助言を受けた。そこで彼は、司祭たちに

とって「役に立つ」対話、つまり信仰宣言と告白の基礎で構成することを決心したので⁶⁰⁾。

また、カトリックの敵としてのオランダ人についても言及がある。悔い改めたい人のための言葉の中に、次のような表現が見られる。「私は火薬を作り、オランダの異端者や海賊に売りました。私の生計を立てるために、私は彼らのために他のものも調達しました。銃と弾丸と大砲と他の戦争の道具。彼らは異端者であり海賊でもあり、神の律法ではそれらを故意に売ったり、助けたり、仕えたりすることは禁じられていると思いますが、私は4年間それをしました」⁶¹⁾。

長崎や江戸での尋問の際、度々現れるオランダ人に対するシドティの敵意は、こうした個所をも読んで影響を受けたことによるのではないだろうか。

3. 『羅西日辞書』 *Dictionarium sive Thesauri Linguae Iaponicae Compendium*⁶²⁾

同書は、ラテン語・スペイン語・日本語の対訳辞書である。『日本文法』と同様、当初はスペイン語・日本語のみの辞書であった。ラテン語が追加された後も、コリヤードはスペイン語の説明も残っていて、読者はラテン語よりもスペイン語の説明を重視した方がいと述べられている。

土井 (1938)⁶³⁾は、「コリヤードの辞書はイエズス会の辞書よりも言語の面において優れているとは言えないが、バチカン図書館にある写本には、鼻子音とアクセントのマークが含まれているという特徴があり、当時の日本語の発音を再現できる」と述べている。この違いはイエズス会とドミニコ会のそれぞれの宣教活動の方法と関係している。イエズス会の方法では、武士階級や仏教僧などへの福音宣教のための教理書や、神学校の子供たちを育成するための文学、言語、その他の目的に即した教科書が必要だったため、書き言葉を重視していたのに対して、ドミニコ会は主に説教と告白に従事していたので、話し言葉の日本語に焦点を合わせているのだ⁶⁴⁾。

以上のコリヤードの三作はヨーロッパで出版された最初の日本語についての書籍で、そして特に『日本文典』は、後に1738年にメキシコでメルチョール・オヤングレン・デ・サンタ・イネス Melchor de Oyanguren de Santa Inés (1688–1747) の『日本文典』が世にでるまで、ジョアン・ロドリゲス João Rodrigues (1562–1633) の『日本文典』を除けば、日本語と日本文法を知る唯一の教材だった。

コリヤードの三作は、布教聖省の支援で出版された書籍であり、布教聖省によって日本に派遣されたシドティが使用していた可能性がきわめて高い。シドティがローマで使用していた「教材」は、布教聖省にあったのか、それとも布教聖省所属神学校 Collegio Urbano にあったのか、あるいは両方の施設に置かれてあったのかは不明だが、シドティがそれらを自由に使う許可を得ていたことは間違いないだろう。

また、コリヤード自身が序文に書いているように、『日本文典』の作成は日本を去ってから10年経過した後であり、しかも言葉の意味や文章の構造などについて確認の取れる日本人もいなかったため、記憶に頼るしかなかった⁶⁵⁾。したがって、不正確な記述があったであろうし、また変化しやすい口語に基づいているため、シドティの入国した頃の日本では既に使われなくなっていった言葉や表現なども散見される。シドティが同書によって学習していたとすれば、彼の話す日

本語が理解しにくいものであったとしても、不思議ではない。

以上の点から、シドティがローマ時代に日本語の学習に使用した教材は、コリヤードの三作である可能性が高いと思われる。

第二章 日本語学習と知識の内容 — 持参していた書籍から考える

『西洋紀聞』の下巻⁶⁶⁾に、「我国の風俗・語言は、いかなる人に以就て、訪ひ学びしにや」と白石に問われたシドティは、懐から小冊子二冊を出して「これら此土の事を記せし所也」と答えている。『西洋紀聞』にはその後、次のように白石の解説が加えられている。

其小冊子の名、一つをば、ヒイターサントールムといふ。これ我国の事を記せし所也。一つをば、デキシヨナアリヨムといふ。これ我国の言葉をしるして、彼方の語を以て翻訳せし所也（二冊子共に、長さ五寸許、広さ四寸許、ここに、やまととちというもののごとくにして、其厚さ、をのをの一寸には余れり。我国の事を記せしといふ物には、絵かきしものを、さしはさみてありき⁶⁷⁾。

シドティが持参していた「二冊子」は、どのような書籍であったのだろうか。

1. 「ヒイターサントールム」

まずは一冊目の「ヒイターサントールム」について考えてみたい。サイズは「長さ五寸許、広さ四寸許、(中略)其厚さ、をのをの一寸には余れり」とある。1寸を3cmと考えれば、15×12×3cmで、現在の文庫本に近い小冊子であったと思われる。

先行研究では、この「ヒイターサントールム」は『サントスのご作業 *Vitae Sanctorum*』、すなわち、天正19年(1591)の加津佐コレジオ刊のローマ字表記による日本語の『サントスのご作業の内抜書』二巻に当たると提言されている。例えば、姉崎正治(1930)⁶⁸⁾によれば、「白石はその中の一冊はヒイターサントールムと云って日本記事也と記してゐる。*Vitae Sanctorum*即ち『サントスのご作業』を読んで、信心の鍛錬と共に日本語の練習にしてゐたに違いないが、奉行所の役人も通詞も、それが何書であるという見当がつかず、白石に対しては、日本の事を書いてあると報告したものらしい」。その後、海老沢有道(1943)⁶⁹⁾、村上直次郎(1950)⁷⁰⁾、竹村覚(1964)⁷¹⁾、宮崎道生(1968)⁷²⁾、松村明(1975)⁷³⁾らは「ヒイターサントールム」を『サントスのご作業 *Vitae Sanctorum*』として、姉崎説を踏襲している。

現在所蔵が確認される本書は3冊⁷⁴⁾あり、うち1冊はオクスフォード大学ボードレイン図書館にある。その表紙の大きさは、縦14.8cm、横10cm、厚さは364葉3cmほどで、サイズ的には近いが、シドティの携帯していた「ヒイターサントールム」が『サントスのご作業 *Vitae Sanctorum*』であったかについては疑問を感じる。ボードレイン図書館所蔵の『サントスのご作

業』には、『西洋紀聞』に記述のある「我国の事」が記されていない。キリシタン版の『サントスのご作業の内抜書』は12使徒や有名な聖人及び初代殉教者の伝記を扱っているため、日本と関係するものは皆無であり、内容的にはそぐわないのだ。

更に、キリシタン版『サントスのご作業の内抜書』は二巻本である。シドティが携帯していた二冊の本の内の一冊が『サントスご作業』であったとしても、どうして二巻本ではなく、一巻本になっているのであろうか。

また、内容に関しても、シドティの説明とは合致しない。『西洋紀聞』には次のような記述がみられる「懐にせし冊子に、一道人の瓶を持って、童子の頂に水を灌く所を絵かきし図を指し示て、これ豊後の大名の子の、法を受ける図也という」⁷⁵⁾。また、「その懐にせし小冊子に、豊臣太閤の事をしるして、テイランにして、我法を禁せ(ぜ)られし由、みえしという。テイランとは、番語に、多く人を殺せる暴悪の人を称ずるといふ」⁷⁶⁾。つまり、内容的には西洋の聖人伝記ではなく、日本でのキリスト教の伝来とその迫害について書かれた本だとうかがえる。上述のように姉崎は、内容についての『西洋紀聞』の記述には信頼を置かず、「奉行所の役人も通詞も、それが何書であるという見当がつかず、白石に対しては、日本の事を書いてあると報告したものらしい」としているが、図を示しながら解説しているのであれば、そうした誤魔化しは通じないであろう。また、日本人の信者に話をする際に、外国の聖人や殉教者よりも、日本で日本の教会のために死を迎えた宣教師や日本人の信者の話をする方が自然で効果的なのではないだろうか。だとすれば、シドティが携帯していた書籍は、『西洋紀聞』の記述のとおり、日本の殉教者のことが書かれたものとして理解するべきであろう。

以上のことから、シドティの携帯していた「ヒイターサントールム」は、先行研究で踏襲されてきた、日本語で書かれたキリシタン版の『サントスのご作業』のことではないと思われる。

それではシドティの「ヒイターサントールム」はどのような書物であったのだろうか？『西洋紀聞』の記述を信頼すれば、冊子は、日本のキリスト教伝道に関わった重要な人物についてのラテン語による書籍だったのではないかと思われる。

日本でキリスト教が厳しい状況に置かれ、さらに古代ローマ時代のものと例えられるような迫害を受けて多くの犠牲者を出した頃から、ヨーロッパではその事態や殉教者等を主題とした記録や絵⁷⁷⁾、図⁷⁸⁾、報告書や伝記などが大量に出版され、ヨーロッパ各語にも翻訳された。フランシスコ・サビエルの伝記以外から例を挙げれば、1597年に豊臣秀吉の命令により長崎で処刑された26人の宣教師や信者達についての出版物が豊富なのはよく知られている。その中では、イエズス会士ニコラ・トリゴー Nicolas Trigault (1577–1628) によってラテン語で書かれた『日本殉教史』(1624年、638頁)⁷⁹⁾、もしくは、ドメニコ・マッカラノ Domenico Maccarano (1591–1656) の『118人以上の殉教史』(1625年、24頁)⁸⁰⁾が知られている。

また、マカオのコレジオの学院長を務めたペドロ・モレホン Pedro Morejon (1562–1639) 作の『日本におけるキリスト教に対する迫害』 *Breve relación de la persecución contra la iglesia de Japón* (1616年、110頁)、イエズス会士アントニオ・カルディム António Cardim (1596–1659) が

1646年にローマで出版した79頁の小冊子『聖フランシスコ・ザビエルがキリスト教信仰を憎む異教徒の中から教会に従う使徒たちを打ち立てた日本において、4人の暴君が死をもたらした修道士と信徒のカタログ』⁸¹⁾等数多くの書籍が残されている。

カルディムの『修道士と信徒のカタログ』は、フランシスコ・ザビエルについての短い伝記に始まり、その後、1557年から1640年の間に日本で殉教した人々の年代順のリストとなっている。また79頁という小冊子であり19.8×15.2×4.4 cm（厚さは第一部、第三部を含めた全体のもの）と、内容・寸法ともに、シドティの携帯していた書物に近いように思われる。さらに、同書の中には、殉教をより残酷に見せることを目的として、図版も所々にあるので、「我国の事を記せしといふ物には、絵かきしものを、さしはさみてありき」という『西洋紀聞』の記述にも一致する。

だが、26殉教者の中にはイエズス会士もフランシスコ会士もいたため、それぞれの修道会がその様子を伝えようとしており、また1627年には教皇ウルバヌス8世Urbanus VIII（1568–1644）によって列福されたこともあり、同事件を扱った出版物は数多く刊行されている。それだけに、シドティの携帯していた書籍の特定はきわめて困難である。

2. 「デキショナアリヨム」

続いて、シドティが持参していたもう一冊の書籍について考えてみたい。『西洋紀聞』には「一つをば、デキショナアリヨムといふ。これ我国の言葉をしるして、彼方の語を以て翻訳せし所也」⁸²⁾とある。つまり日本語の見出し語で、それに対する西洋語訳が付された「辞書」を意味している。この「デキショナアリヨム」の特定を試みてみたい。

まずは先行研究を確認しておきたい。竹村（1964）⁸³⁾は文禄4年（1595年）の天草版の『垃葡日対訳辞典』*Dictionarium Latino Lusitanicum, ac Iaponicum*か、慶長8–9年（1603–4年）長崎版『日葡辞書』*Vocabulario da Lingoa de Iapam*のいずれかであったとしている。そして宮崎（1968）⁸⁴⁾も竹村説をそのまま踏襲している。

その一方で松村（1975）⁸⁵⁾は、豊かな根拠を提示して議論を展開している。

シドッチはイエズス会に属する宣教師であるから、キリシタン版の日本語辞書を利用したという。日葡辞書が考えられるが日葡辞書はポルトガル語の原書名が「デキショナアリヨム」という本文には符合しない。キリシタン版の中で「デキショナアリヨム」に相当する書名の辞書としては、1595年の天草学林刊の垃葡日対訳辞典がある。これは、ラテン語の見出しに対して、ポルトガル語およびローマ字綴りの日本語で語訳を付けたものである。「我国の言葉をしるして、彼方の語を以て翻訳せし所也」の本文にはやや適合しないところもある。なお、「デキショナアリヨム」の書名を持つ辞書には、他に、ドミニコ会のコリヤード編、1632年にローマ刊の垃西日対訳辞書もある。

シドティをイエズス会士であると誤解し⁸⁶⁾、イエズス会が出版していたものを使用せざるを得な

いということ为背景にして、天草版か長崎版のどちらかの辞書の可能性を示唆している点はさておき、辞書名のなかに「デキシヨナアリヨム」という言葉が入っていることを根拠に、天草版の辞書かもしくは1632年のローマ刊のコリヤード編の辞書を挙げている。ただしコリヤードはイエズス会ではなくドミニコ会士であると彼自身指摘しながら、「イエズス会の学校から出版されたキリシタン版の日本語辞書を利用したと思われる」という記述をしているのには矛盾がみられる。コリヤード編の辞書を挙げているのは、おそらく『カトリック大辞典』⁸⁷⁾の中にコリヤードの書籍の可能性が指摘されているためであろう。

また、海老沢有道 (1973)⁸⁸⁾は「当時シドティが手に入れられたのは、天草版の辞書とコリヤードの辞書だが、懐に入れられるサイズを考えれば、3万以上の単語と900ページにも上る大冊である天草版の辞書は無理がある。したがって、コリヤードの辞書は可能性としては十分にありうる」と述べている。

最後に小川 (1998)⁸⁹⁾は、「ルソンで日本人に習った日本語を書き留めた自分のノートで、シドティはそれを常に懐に入れていた可能性もあるのではないだろうか。そして、そのノートは何かと問われれば、『辞書』と答えるのは自然なことである」と新たな可能性を提案している。

次に、外国の書簡および報告書の記述を参考に、シドティの「デキシヨナアリヨム」の特定を試みたい。マニラのフランシスコ会管区長アウグスティン・デ・マドリード Augustín de Madrid の(シドティが上陸する前までに一緒にいた船の乗組員の説明に基づいた)報告書(1717)の中に、シドティの携帯品が次のようにリストアップされている。「ごく小さなミサ典書、聖務日課、日本語の文法書一冊、ミサ聖祭に必要な各種の祭具」⁹⁰⁾。ここでは、「辞書」ではなく「文法書」となっているのだ。

更に、パリ外国宣教会所属のイエズス会士フォーレ Père Faure 神父が同会士に宛てた手紙(1711)によれば、シドティの携帯品は「ミサ聖祭のための祭具一式、聖油をいれた容器、聖務日課、『キリストにならいて』、日本語の文法書2冊、その他の信仰書数冊(中略)」⁹¹⁾とあり、アウグスティン・デ・マドリードの報告書と同じく「文法書」だが数量が増えて「2冊」と記述されている。この書簡および報告書に記述されたシドティの携帯品に、『西洋紀聞』に出てくる「デキシヨナアリヨム」はない。それではこの記述の矛盾をどう考えればいいのだろうか。

実は、コリヤード『羅西日辞書』の序文には次のように述べられている。

すでに『日本文典』および『告白の方法』『信仰に関する玄義』(両者がいわゆる『懺悔録』に該当するのである)を、そして最後にこの日本語辞書を印刷発行する布教聖省の命にしたがい、日本語を学ばんとする人々にとって、必要なすべてのものが集められ、信仰宣布の仕事にしたがう人々の間にわけられるように、これらの書は一冊に合綴されたのである⁹²⁾。

したがって、別々に書かれたコリヤードの三作(『日本文典』『懺悔録』『辞書』)は一冊の本として出版された。シドティはその合本を持っていたのではないだろうか。そのため、外国の史料

には「文法書」と記録されたと考えるのが自然であろう。その一方で、どんな本だと問われたシドティが「デキシヨナリヨム」(辞書)と、おそらくは説明しやすい部分だけを取り上げて答えたと考えられる。だが白石はその「デキシヨナリヨム」を見て、「これ我国の言葉をしるして、彼方の語を以て翻訳せし所也」と記している。『日本文典』は基本的にスペイン語で書かれ、時おり日本語の引用があるにすぎない。『辞書』は、単語の見出しはラテン語で、日本語の訳が付された、いわゆる「羅和辞典」である。日本語の翻訳として外国語が付されているという白石の説明にあたるのは、ローマ字表記の日本語分に、スペイン語の対訳が見開きで掲載されている『懺悔録』だけである。いずれにせよ、三作は合本であったため問題はないが、白石が手にして開いたページは『懺悔録』であったのだろう。

おわりに

以上、シドティの日本語および日本についての知識について、2章にわたって分析した。先行研究では彼がマニラで日本人に日本語を教わった点だけが繰り返されてきたが、本稿では、日本とヨーロッパの資料を比較分析することによって、以下の3点を明らかにした。

1. シドティは、出発前のローマで日本語学習を始めている可能性が高い。長崎及び江戸での尋問にみられる、シドティが日本語を「六年前から」学習しているという記述に従えば、ローマを出る直前となるため、「六年間」の誤訳の可能性も十分にありうる。そうであれば、出発前のローマで日本語学習を始めているというのは単なる可能性ではなく、実現可能な事実にもなりうる。
2. ローマのシドティが、どのような書籍を使用できたのか、どのような学習環境にあったのかを明らかにした。豊かな出版文化を持つ当時のローマでは、キリシタン版の書籍やイエズス会士らの報告書、そして日本の歴史・地理・文化・風俗はじめ、宣教活動の経過や成果に基づいた書籍だけではなく、天正・慶長使節と鎖国後のキリスト教追放の反響を受けて書かれた書籍が数多く出回っていた。イエズス会と敵対する布教聖省に属していたシドティが、イエズス会本部に出入りすることが困難であったとしても、いくつかの書籍は布教聖省でも入手できた。ローマ時代のシドティは、日本についての情報や日本語学習の教材を入手可能であり、彼自身が述べているように、イタリアを出発する前に、既に日本語の習得を始めていた可能性が高いと思われる。
3. シドティの携行品リストには二冊の書物があり、多様な視点からその特定を試みた。先行研究では、そのうち一冊は日本語で書かれたキリシタン版の『サントスのご作業』とされてきたが、シドティの所持していた書物は西洋の聖人伝ではなく、日本におけるキリスト教の伝来とその迫害について書かれたものであり、内容的にはそぐわないことを、『西洋紀聞』他の文献を入念に読み返すことで明らかにした。だが、当時流布していた類書はきわめて多く、残念ながらその特定には至らず幾つかの候補を挙げるにとどまったため、今

後の課題としたい。また、シドティが携行していたもう一冊の「デキショナアリヨム」については、文献によって「文法書」や「辞書」と記述が矛盾しているが、コリヤードの『日本文典』、『懺悔録』および『羅西日辞書』が当時合本で刊行されていたことを鑑み、その合本であった可能性が高いことを究明した。

以上の点を踏まえると、シドティの日本潜入は単なる偶然や衝動から生まれた行動ではなく、「若い時から」ある程度の計画性をもって準備されたものだと思われる。そしてこうした計画性は、屋久島および長崎では全く通じなかった彼の日本語が、江戸での尋問においてはそれなりに理解されたという、シドティの矛盾した日本語能力をどのように考えるかという問題に一石を投じることになる。彼自身が述べ、また携行品に教材が含まれているように、シドティが、従来考えられてきたように中継地マニラにおいてだけでなく、それ以前から日本語を学習していた可能性はきわめて高い。そうであれば、屋久島および長崎での尋問と、江戸での尋問において、シドティの日本語能力の評価が著しく分かれるという事実は、彼の言語能力を超えたところにその原因を求める必要があると思われる。外国人の日本語に耐性のない屋久島の役人、オランダ語を解さないイタリア人神父との言語コミュニケーションに対する長崎の不備、そうした失敗例を踏まえて通訳の経験値が上がり、江戸での尋問が円滑に行われた可能性もある。また、江戸での尋問では、『西洋紀聞』にみるように、二人の知識人による知への熱意や学問的な関心が高く、そうした議論の中身への関心が、不完全な言語コミュニケーションを容易にしていたことも考えられる。江戸での白石との議論を通じたシドティの日本語力の評価については、今後の課題としたい。

注

- 1) 苗字についてはSidoti, Sidottiの両方が見られる。日本語訳もシドッチ、シドッティ、シドティなど表記が様々だが、本論考ではトルチヴィア・マリオ「ジョヴァンニ・バッティスタ・シドティ」(2019)に倣って「シドティ」に統一する。
- 2) トルチヴィア・マリオ(2019)、前掲書、56頁。
- 3) この時のシドティの演説は当時*Oratio habita* (1693)として出版されている。
- 4) Di Fiore, Giacomo. *Maillard de Tournon*. (2006) in *Dizionario Biografico degli Italiani*. Vol. 67, pp. 539–544.
- 5) Ripa, Matteo. *Storia della Fondazione della Congregazione e del Collegio de' Cinesi*. (1832), p. 287.
- 6) *Soggetti deputati per le missioni della Cina dalla Sacra Congregazione de Propaganda Fide*, 30 dicembre 1701, in *Archivio della Congregazione di Propaganda Fide* (以後APF), SOCP, vol. 21 (1701–1703), f. 279r.
- 7) *Relazione del Viaggio dall'isola di Tenariff..di Monsignor Carlo Tommaso Maillard de Tournon*, (1704), p. 14.
- 8) *Carta de Mons. Camacho y Ávila al Cabildo de Badajoz, [en Manila]*, 14–11–701, in Rubio Merino P., (1958), p. 409. *Declaración del G.ral Eloriaga*, in Ms. 1635, ff. 24–34によれば、シドティは9月5日にマニラに到着している。Tollini, Aldo. “Sidotti in Manila” (1982), p. 130でも同様である。
- 9) カパッソ・カローリーナ「宣教師シドッティの研究」(2002)、110–143頁。
- 10) 第一回は1707年9月16日～11月27日の間であったが、失敗している。同行人は跣足アウグス

- ティヌス会マヌエル・デ・サン・ニコラス・デ・トレンティーノで、記録が残されている。Cuesta, Á. Martínez (1995), p. 401. 第二回目は1708年8月22日であったが、この時シドティはマカオに上陸し、二種類の資料が残っている。一つ目は1708年1月5日付のマカオ発イエズス会士ジョヴァンニ・バッティスタ・メッサーリより同士ミハエル・ファイトへの書簡: “In den October kame nach Macao ein Schiff von Manila welches mitbrachte, wie dass der Abbate Cidotti ein Panormitaner mit ein Augustiner und 4 Japonaser gereiset seint nach Japon[...]”, [Brief] Giovanni Battista Messari S.J. an [Micheal Fait S.J.], Macao, 5 Januar 1708, in G.W. Leibniz, (2017), p. 96. 二つ目は1710年5月22日付マカオ発パリ外国宣教会に属する宣教師ジャン・フランク・マルティン・デ・ラ・バルエール (1668–1715) の書簡: “Sidoti, qui in istud Regni duobus abhinc annis advenit [...]”, Lettera di Jean Franç Martin de La Baluere S.dos Miss. Ap.licus a[...], Makaõnis die Maj 22^a anno 1710, in Ms. 1635, f.135.
- 11) Augustin de Madrid. *Relación del viage*. (1717), in Ms. 1635. Ff. 100–126.
 - 12) 宮崎道生『新訂 西洋紀聞』(1968), 239–275頁。
 - 13) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 「出島蘭館日誌」, 202頁。
 - 14) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 424頁。
 - 15) 松田毅一「シドッティの日本潜入」(1978), 139頁。
 - 16) 片桐一男「シドッチ尋問二十四箇条の発見」(1994), 14–19頁。
 - 17) トルチヴィア・マリオ (2019), 前掲書, 65–66頁。
 - 18) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 67–8頁。
 - 19) 「サチェルドス」とは司祭を意味するラテン語だが、シドティが司祭になったのはローマではなくバレルモで(1689年)である。トルチヴィア (2019), 前掲書, 57頁。
 - 20) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 202頁。
 - 21) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 4頁。
 - 22) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 「長崎注進邏馬人事」下巻, 261頁。オランダの史料にも明確に記録されている, “Kort verbaal van het voorgevallene ten hurze der Heeren Nangasackischen Gouverneurs, of Stadsvoogden, Farrima, en Figono Cⁱ.s^a., ontrent zeker Roomsche Priester, Johan Baptista Sidoti genaamd, in’t laatst van A. 1708 hier in Japan op ‘t Eiland Iaconossima, een der buiten-leggende Eilanden van Zatsuma, aan land gezet”, in Valentijn, François. *Oud en Nieuw Oost-Indiën* (1726), pp. 157–164.
 - 23) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 「長崎注進邏馬人事」上巻, 253頁。
 - 24) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 67–8頁。
 - 25) APF, SOCP, 前掲書, vol. 21, f. 279r.
 - 26) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 239–276頁。
 - 27) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 202頁。
 - 28) 大通詞今村源右衛門。
 - 29) *Japan Dagregister* オランダ国立中央公文書館 (ARA) 所蔵 NFJ 120, 1708 nov. 2–1709 okt. 22 Jasper van Mansdale. in 今村英明「潜入宣教師シドッチの長崎における尋問」(2000), 19–45頁。
 - 30) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 70–71頁。
 - 31) Rouleau, Francis A. “Maillard de Tournon. Papal legat at the Court of Peking”. (1962), pp. 264–323.
 - 32) *Oud en Nieuw Oost-Indiën* は1724~26年の間に書かれ, 1,000を超える図を含み, 極東の国々の最も正確な地図のいくつかを含む5部構成8巻からなる著作。
 - 33) “Ik heb van jongs af aan daar toe gestudeerd, en door de oude Japansche boeken, in Romen zynde, my in de Japanische taal geoeffend, tot dat de Paus my herwaards gezonden heft”. in Valentijn, François. *Oud en Nieuw Oost-Indiën* (1726), 前掲書, pp. 157–164. 宝永5年11月9日にダウのラテ

- ン語を介して今村源右衛門が「24箇条」にわたる質問を行ないその様子は、「オランダ商館日誌」にも記されている。この問答の内、シドティの答の部分のみが「異国人口書」として長崎奉行所から江戸に進達され知られていた。しかし、長崎シーボルト記念館での調査で1994年片桐一男によって問題の尋問の「24箇条」が発見された。文書名は「異国人_正可相尋事」と題され、11月9日付けとなっている。片桐一男（1995）、89–113頁。
- 34) シドティは1667年生まれで、日本に潜入したのは1708年10月11日（宝永5年8月29日）；1708年10月10日付日本に上陸する前夜、屋久島（誤り種子島）からの書簡が残されている。カサナテンセ文庫所蔵手橋本部Ms.1635包に所収。
 - 35) マニラに着いたのは1704年9月, in Ms. 1635, ff. 24–34.
 - 36) 1693年, 26歳のシドティは, 教皇イノケンティウス12世の前で演説をした（注2を参照）。ローマに移ったのは, この1693年以前と考えるのが妥当であろう。なお, 1689年にはパレルモのイエズス会学院で神学及び哲学の学位を取得しているということを考え合わせると, ローマに移ったのは1689年末から1692年末の間になる。
 - 37) Roscioni, Gian Carlo. *Il desiderio delle Indie*. (2001), pp. 67–96.
 - 38) Russell, Camilla. *Imaging the 'Indies'*. (2011), pp. 179–189.
 - 39) Frei, Elisa. *Sfoghi di un cuore infiammato*. (2017), pp. 51–69.
 - 40) Frei, Elisa. *Signed in Blood*. (2019), pp. 1–56.
 - 41) Mongitore A. *Bibliotheca sicula*. (1707), p. 337.
 - 42) “Florente adhuc aetate à Thoma Maria Ferrario, statim ac in Cardinalium Collegium anno 1695 fuit cooptatus, in suum Auditorem delectus est”（彼はまだ若いうちに、1695年に枢機卿に選任されたトーマス・マリア・フェラーリによって聴取官に選ばれた）。同上。
 - 43) 16世紀以来、ドミニコ会とイエズス会は典礼問題をめぐって激しく争った。ドミニコ会はカトリック正統派の執拗な擁護者であるに対して、イエズス会は、他の文化に対してより弾力的な寛容の態度を見せていた。この委員会の作業は3年間続いたが、フェラーリが起草した「中国の典礼問題についての神学上の返答」*Responsa theologica super questionibus de ritibus Sinicis*（同文は1707年に教皇クレメンス11世が發布した勅書*Ex Illa die*にはほぼ文字通り取り入れられた）をもって、1704年1月17日に終了した。そして同じ日に、中国の伝統と儀式によってキリスト教の儀礼を行うと主張していた中国のカトリック教徒を、偶像主義者として非難する法令が発行された。Di Rienzo, E. (1996). *Ferrari, Tommaso Maria*. in *Dizionario Biografico* (treccani.it), pp. 667–670.
 - 44) Buringh, Eltjo and Jan Luiten Van Zanden. *Charting the 'Rise of the West'*. (2009), pp. 409–445.
 - 45) Gualtieri, Guido (1586); Ciappi, M. A. (1596); Ramusio, G.B. (1550–1559); Amati, S. (1615); 等。
 - 46) 豊島正之編『キリシタンと出版』（2013）、8頁；張秀民共著『活字印刷の文化史：キリシタン版・古活字版から新常用漢字表まで』（2009）、19–68頁；新井トシ共著『キリシタン版の研究』（1973）、9–46頁。
 - 47) Laures, Johannes (1956). *Kirishitan Bunko*. Tōkyō: Sophia University, pp. 1–126.
 - 48) ヴァリニャーノ・アレッサンドロ著『日本巡察記』松田毅一他訳。（1995）、173頁。
 - 49) 版本保存作品は、現在までに少なくとも、30の書籍と4作の断片が発見されている。五野井隆史『キリシタンの文化』（2012）、184–185頁。Chibbett, D. G. *The History of Japanese printing and book illustration*. (1977), pp.61–78; Laures, Johannes (1956), *Kirishitan Bunko*, 前掲書, pp. 26–82.
 - 50) 合計73の作品が知られている。最新の調査によると、国別のキリシタン版を所有数は、日本16、英国14、イタリア10、中国6、フランス5、ポルトガル5、スペイン4、オランダ3、フィリピン3、米国3、ドイツ2、パチカン2作。Luoreiro, R. M. “Alessandro Valignano and the Christian Press in Japan”. (2006), pp. 135–53; Orii, Yoshimi. “The Dispersion of Jesuit Books Printed in

- Japan”. (2015), p. 195.
- 51) Pacheco, Diego. “Diogo de Mesquita, S.J.,” (1971), pp.431–443.
 - 52) 上智大学のラウレスキリシタン文庫又は国際日本文化研究センターの日本関係欧文図書目録。ラウレスキリシタン文庫データベース (sophia.ac.jp)
 - 53) Valentijn, François. *Oud en Nieuw Oost-Indiën*. 前掲書, (1726), p. 159.
 - 54) Pedot, Lino. *La S.C. De Propaganda Fide e le Missioni del Giappone (1622–1838)*. (1946), p. 51.
 - 55) スペインのミヤーハダス出身。1604年ごろドミニコ会に入会。アロンソ・デ・ナバレテ率いる宣教団の一員としてフィリピンに派遣され, 1611年にマニラに到着, ミンダナオ島のカガヤンで宣教を行った。1619年に日本に渡って, 布教活動を開始した。日本滞在中にスペイン・ドミニコ会員ハシント・オルファネル (1578–1622) の『日本キリシタン教会史』完成に協力した。平山常陳事件 (1620年) でイギリス平戸商館に捕らえられていたドミニコ会同僚のルイス・フロレスの救出活動に参加するが, 1622年にフロレスは火刑となり, 続いてカトリック聖職者・信徒の大規模な処刑 (元和の大殉教) が行われた。コリヤード自身は難を逃れ, 大殉教の目撃者となった。同年11月に報告のため日本を去って, 1623年にローマに到着し, 列福調査報告書を教皇庁に提出した。その後, どの管区にも属さない宣教師団を率いてフィリピンに渡り, 1635年にマニラに到着。アジアを拠点としたイエズス会に対抗する新しい教会組織作りを図るも失敗に終わる。スペイン国王の命によって追放され, 帰国途中に乗船が遭難して死亡したと伝えられている。Odstrčilík, Jan. “Between Languages, Genres and Cultures: Diego Collado’s Linguistic Works”. (2020), pp. 117–151.
 - 56) Collado, Diego (1632). *Ars grammaticae Iaponicae linguae*. Sacr. Congr. de Propag. Fide, Roma.
 - 57) ポルトガル人イエズス会士ジョアン・ロドリゲス João Rodrigues (1561–1633) は, 日本語が堪能で通訳としても活躍した。「通事 (ツーズ)」の名で知られている。ロドリゲスには「日本文典」(「大文典」長崎で, 1604年~1608年にかけて刊行)と「小文典」(1620年にマカオ)の二著があり, いずれも三巻から成り, 取り扱う事項の配列が異なる。豊島正之 (2013), 前掲書, 250頁; 小鹿原敏夫 (2015) 『ロドリゲス日本大文典の研究』; 川口敦子「小鹿原敏夫著『ロドリゲス日本大文典の研究』」(2016), 149–156頁; Boxer, C. R. *Padre João Rodrigues S. J. and his Japanese Grammars of 1604 and 1620*. (1950), pp. 338–63; 福島邦道『日本小文典: ロンドン大学オリエント・アフリカ研究所蔵』(1989) 203–227頁。
 - 58) Collado, Diego. (1632), 前掲書, pp. 3–5; ed. and transl. R. L. Spear. *Diego Collado’s Grammar of the Japanese Language*. (1975), p. 3.
 - 59) 大塚光信校注, コリヤード著『懺悔録』(1986)。
 - 60) Odstrčilík, Jan. (2020), 前掲書, pp. 133.
 - 61) Odstrčilík, Jan. (2020), 前掲書, pp. 117–151.
 - 62) 大塚光信校注, コリヤード著『羅西日辞典』(1966)。
 - 63) 土井忠生, 「コリヤド日本文典の成立」(1938), 261–266頁。
 - 64) Montané, Carla Tronu. “Los primeros materiales para el estudio del japonés”. (2012), pp. 755–762.
 - 65) 大塚光信 (1966), 前掲書, 9頁。
 - 66) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 68頁。
 - 67) 同上。
 - 68) 姉崎正治『切支丹伝道の興廢』(1930), 773頁。
 - 69) 海老沢有道『切支丹典籍叢考』(1943), 41–45頁。
 - 70) 村上直次郎「切支丹屋敷」(1950), 709頁。
 - 71) 竹村覚『キリシタン遺物の研究』, (1964), 274–5頁。
 - 72) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 157頁の注162。

- 73) 松村明, 『新井白石』 (1975), 58頁の頭注。
- 74) オックスフォード大学ボードレイン図書館蔵本, ヴェネツィア国立マルチャーナ図書館蔵本, パリ国会図書館蔵本。
- 75) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 72頁。ここに出てくる「豊後の大名」は, 宗麟の名で知られた大友義鎮 (1530–1587) である。天正 6 年 7 月 25 日 (1578 年 8 月 28 日) イエズス会司祭フランシスコ・カブラル (1528–1609) より受洗し, 洗礼名はドン・フランシスコ。又, 「大名の子」というのは大友宗麟の嫡男大友義統 (1558–1610) で, 彼もまた洗礼を受けコンスタンチノという洗礼名を受けていたが, 後に秀吉の追放令により, 棄教した。
- 76) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 78頁。
- 77) Japanese artist, unknown - 16th-17th century Japanese painting, ChristianMartyrsOfNagasaki - 26 mártires de Japón - Wikipedia, la enciclopedia libre
- 78) Kilian, Wolfgang (1597), <http://daten.digitale-sammlungen.de/~db/0006/bsb00064463/images/index.html>
- 79) 同じトリゴ著で『日本におけるキリスト教の勝利』(1623年, ラテン語)は, 1612年から1620年までの日本のキリスト教殉教者について述べた書物。De christianis apud Japonios triumphis sive de gravissima ibidem contra ... - Nicolas Trigault - Google ブックス; 又1601年には, 同じイエズス会士ルイス・デ・グスマン著作の『インド・中国・日本におけるイエズス会の宣教史』が出版されている。
- 80) ラウレスキリシタン文庫データベース (sophia.ac.jp)
- 81) 'Cardim, Antonio Francisco: Catalogvs Regylarivm, Et Secvlarivm, Qui in Iapponiae Regnis vsque à fundata ibi A S. Francisco Xaverio Gentis Apostolo Ecclesia Ab Ethnicis In odium Christianae Fidei Sub quatuor Tyrannis violenta morte sublatis sunt', Bild 1 von 80 | MDZ (digitale-sammlungen.de)
- 82) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 68頁。
- 83) 竹村覚 (1964), 前掲書, 274–5頁。
- 84) 宮崎道生 (1968), 前掲書, 157頁の注163。
- 85) 松村明 (1975), 前掲書, 479頁。
- 86) シドティがイエズス会に属していないのを著者の研究で以前証明できた。カパツ (2002), 前掲書, 112~119頁参照。
- 87) 『カトリック大辞典』(1940), Iの「切支丹屋敷」の項目707–710頁。
- 88) 海老沢有道「天草『羅葡日辞書』2冊の行方」(1973), 28頁。
- 89) 小川早百合「欧文史料にみる宣教師シドッティ」(1998), 11–32頁。
- 90) Augustin de Madrid. *Relación del viage*. (1717), 前掲書, p. 112.
- 91) "l'ouvril & il y trouva pour tout meuble une chapelle, une boëte qui renfermoit les saintes Huiles, un Bréviaire, l'imitation de JESUS-CHRIST, deux Grammaires Japonnoises, quelques autres livres de piété". *Lettre du Père Faure*, in Peter Kapitza (1990), II, 139; 又 は *Lettre édifiantes et curieuses*. Nicolas Le Clerc, (1732), pp. 47–73.
- 92) 土井忠生 (1966), 前掲書, 8–9頁。

参考文献

- Amati, Scipione (1615), *Historia del Regno di Voxu del Giappone, dell'antichità, nobiltà, e valore del suo re Idate Masamune ... e dell'ambasciata inviata a Paolo V*. Roma, Giacomo Mascardi.
- 姉崎正治 (1930) 『切支丹伝道の興廢』 同文館.
- 新井トシ共著 (1973) 『キリシタン版の研究』 富永先生古稀記念, 天理: 天理大学出版部.

- Archivio della Congregazione di Propaganda Fide (APF, 布教聖省文書館) SOCP, vol. 21 (1701–1703), f. 279r.
- Augustin de Madrid, (8 marzo 1717), *Relación del viage que hizo el Abad Don Juan Bautista Sydot, desde Manila al Imperio del Japon, embiando por Nuestro Santissimo Padre Clemente X.* Sacada ..., [Madrid].
- Boxer, C. R. (1950), *Padre João Rodrigues Tçuzu S. J. and his Japanese Grammars of 1604 and 1620.* Miscelânea de Filologia, Literatura e História Cultural: À memória de Francisco Adolfo Coelho (1847–1919). V. 2. Lisboa: Centro de Estudos Filológicos. 1950, pp. 338–63.
- Buringh, Eltjo and Jan Luiten Van Zanden (2009), “Charting the ‘Rise of the West’: Manuscripts and Printed Books in Europe, a Long-Term Perspective from the Sixth through Eighteenth Centuries.” *The Journal of Economic History*, vol. 69, no. 2, pp. 409–445.
- カパッソ・カロリーナ (2002) 「宣教師シドティの研究」『神戸女学院大学論集』49 (2), 110–143.
- Cardim, António Francisco (1646), *Catalogus regularium, et secularium, qui in Iaponiae regnis usque à fundata ibi a S. Francisco Xaverio gentis apostolo ecclesia ab ethnicis in odium Christianae fidei sub quator tyrannis violenta morte sublata sunt.* Romae: Corbelletti.
- Ciappi, M.A. (1596), *Compendio delle heroiche et gloriose attioni, et santa vita di papa Gregorio XIII distinto in tredici capi, in memoria delli XIII anni, che esso visse nel suo felice ponteficato: raccolto da Marc’Antonio Ciappi e dal medesimo nuovamente corretto, et di molte parti accresciuto.* Roma, Stamperia de gli Accolti.
- Chibbett, David G. (1977), *The History of Japanese printing and book illustration.* Tokyo, Kodansha.
- 張秀民共著 (2009) 『活字印刷の文化史：キリシタン版・古活字版から新常用漢字まで』 勉誠出版.
- ChristianMartyrsOfNagasaki - 26 mártires de Japón - Wikipedia, la enciclopedia libre
- Collado, Diego (1632), *Ars grammaticae Iaponicae linguae.* Sacr. Congr. de Propag. Fide, Roma.
- Cuesta, Á. Martínez (1995), *Historia de los Augustinos Recoletos*, vol.I, Desde los origins hasta el siglo XIX, Editorial Augustinos, Madrid.
- Di Fiore, G. (2006), *Maillard de Tournon, Carlo T.* Dizionario Biografico degli Italiani, vol. 67, Treccani, Roma.
- Di Rienzo, E. (1996), *Ferrari, Tommaso Maria.* Dizionario Biografico degli Italiani, vol. 46, Treccani, Roma.
- 土井忠生 (1938) 「コリヤド日本文典の成立」『日本諸学振興委員会研究報告』3巻, 261–266.
- 海老沢有道 (1943) 『切支丹典籍叢考』 拓文堂.
- 海老沢有道 (1973) 「天草『羅葡日辞書』2冊の行方」, 『えびすとら』49, 25–32.
- Frei, Elisa. (2017), *Sfoghi di un cuore infiammato. Il desiderio dei gesuiti italiani per le Indie Orientali (1687–1730)*, Dissertation Thesis.
- Frei Elisa. (2019), *Signed in Blood : Negotiating with Superiors General about the Overseas Missions, in Studies in the Spirituality of Jesuits*, 51/4, 2019.
- 福島邦道編 (1989) 『日本小文典：ロンドン大学オリエント・アフリカ研究所蔵』 J. ロドリゲス著, 笠間書院.
- 五野井隆史 (2012) 『キリシタンの文化』 吉川弘文館.
- Gualtieri, Guido (1586), *Relazioni della venuta de gli ambasciatori giapponesi à Roma, sino alla partita di Lisbona. Con una descrizione del loro paese, e costume, e con le accoglienze fatte loro da tutti I principi Christiani per dove sono passati.* Venezia, Gioliti.
- Guzman, Luis de (1601), ルイス・デ・グスマン, 『インド・中国・日本におけるイエズス会の宣教師』.
- 今村英明 (2000) 「潜入宣教師シドッチの長崎における尋問」, 『日蘭学会会誌』25巻1号, 19–45.

- Japan Dagregister*, オランダ国立中央公文書館 (ARA) 所蔵NFJ 120, View file | Nationaal Archief.
- 片桐一男 (1994) 「シドッチ尋問二十四箇条の発見」『学鑑』91巻7号, 14–19頁。
- 片桐一男 (1995) 『阿蘭陀通詞今村現右衛門英生』, 丸善ライブラリー-145.
- 『カトリック大辞典』 上智大學, 獨逸ヘルデル書肆共編, 東京1940富山房, I.
- 川口敦子 (2016) 「小鹿原敏夫著『ロドリゲス日本大文典の研究』『日本語の研究』12 (3), 149–156.
- Kilian, W. (1581–1663), Die Märtyrer von Nagasaki (1597), Augsburg. <http://daten.digitale-sammlungen.de/~db/0006/bsb00064463/images/index.html>
- Laures, Johannes (1956). *Kirishitan Bunko: A Manual of Books and Documents on the early Christian Mission in Japan, with special Reference to the principal Libraries in Japan and more particularly to the collection at Sophia University*. Tokyo. Sophia University. ラウレスキリシタン文庫データベース (sophia.ac.jp)
- Leibniz, G.W. (2017), *Briefe über China (1694–1716). Die Korrespondenz mit Barthélemy Des Bosses und anderen Mitgliedern des Ordens*. Herausgegeben und kommentiert von Rita Widmaier und Malte-Ludolf Babin. Felix Meiner Verlag, Hamburg.
- Lettre du Père Faure, Missionnaire de la Compagnie de Jesus. Au Père de la Boësse de la mesme Compagnie. A la sortie du Détroit de Malaca dans le Golf de Bengale à bord de Lys-Brillac, le 17 Janvier 1711. In *Japan in Europa: Texte und Bilddokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt*, herausgegeben von Peter Kapitza, München, Judicium Verlag 1990, II, 139.
- Lettre édifiantes et curieuses. Ecrites des Missions Etrangères par quelques Missionnaires de la Compagnie de Jésus. X. Recueil, Chez Nicolas Le Clerc, Paris 1732, pp. 47–73.
- Luoreiro, Rui Manuel (2006), Alessandro Valignano and the Christian Press in Japan. *Revista de Cultura*. Macao: Instituto Cultural de Governo da R.A.E. de Macau, 19, pp. 135–53.
- Maccarano, Domenico (1625), *Breve narrazione del martirio di cento diciotto e più martiri*. Napoli.
- 松田毅一 (1978) 「シドッチの日本潜入」『大航海時代の日本』3, 岩波書店, 129–140.
- 松村明 (1975) 『新井白石』日本思想大系35, 岩波書店.
- 宮崎道生 (1968) 『新訂西洋紀聞』, 東洋文庫113, 平凡社.
- Mongitore A. (1707), *Bibliotheca sicula*, t. I, Ex Typographia Didaci Bua, Palermo.
- Montané, Carla Tronu (2012), *Los primeros materiales para el estudio del japonés realizados por un español: Diego Collado OP y la misión japonesa en el s. XVII*. In *Estudios Filológicos*, 337, Séptimo Centenario de los estudios orientales en Salamanca. Salamanca, pp. 755–762.
- Morejon, Pedro (1616), *Breve relación de la persecución contra la iglesia de Japón*. Mexico.
- 村上直次郎 (1950) 「切支丹屋敷」『カトリック大辞典』I, 富山房.
- Ms. 1635. Miscellanea di scritti vari circa il viaggio che l'Abbate Giovanni Battista Sidoti cercò di fare in Giappone, Biblioteca Casanatense, Roma.
- Odrščilik, Jan (2020), «Between Languages, Genres and Cultures: Diego Collado's Linguistic Works». *Medieval Worlds* (11): 117–151. doi:10.1553/medievalworlds_no11_2020s117
- 小川早百合 (1998) 「欧文史料にみる宣教師シドッチ」『キリスト教史学』第52集, 11–32.
- 小鹿原敏夫著 (2015) 『ロドリゲス日本大文典の研究』大阪: 和泉書院.
- Oratio habita in sacello Quirinali coram sanctiss. D.N. Innocentio 12. pontifice maximo die S. Joannis apost. et Evang. a Jo. Baptista Sidoti Panormitano ...*, Sidoti, Giovanni Battista. Ex typographia Jo. Jacobi Komarek Boemi apud S. Angelum Custodem, Romae, 1693.
- Orii, Yoshimi (2015), The Dispersion of Jesuit Books Printed in Japan: Trends in Bibliographical Research and in Intellectual History. *Journal of Jesuit Studies* 2, pp. 189–207.

- 大塚光信校注 (1986), コリヤード著『懺悔録』岩波書店.
- 大塚光信校注 (1966), コリヤード著『羅西日辞典』土井忠生序文, 臨川書店.
- Pacheco, Diego (1971), Diogo de Mesquita, S.J. and the Jesuit Mission Press. *Monumenta Nipponica* XXVI, 3–4, 431–443.
- Pedot Lino (1946), *La S.C. De Propaganda Fide e le Missioni del Giappone (1622–1838)*. Vicenza.
- Ramusio, G.B. (1550–1559), *Delle Navigazioni et Viaggi*. Venezia, Giunti.
- Relazione del Viaggio dall'Isola de Tenariff nelle Canarie fino a Pondisceri nella Costa di Coromandel di Monsignor Carlo Tommaso Maillard de Tournon, Patriarca di Antiochia e Visitatore Apostolico con le facultà di Legato a Latere à I Regni della Cina, e dell'Indie Orientali, Per Gaetano Zenobj*, Roma 1704.
- Ripa Matteo (1832), *Storia della Fondazione della Congregazione e del Collegio de' Cinesi sotto il titolo della Sagra Famiglia di G. C.*, t. I, Napoli.
- Roscioni, Gian Carlo (2001), *Il desiderio delle Indie. Storie, sogni e fughe di giovani gesuiti italiani*, Torino.
- Rouleau, Francis A. (1962), Maillard de Tournon. Papal legat at the Court of Peking. In *Archivio Historico Societate Iesu*, XXXI, pp. 264–323.
- Rubio Merino P. (1958), *Don Diego Camacho y Ávila Arzobispo de Manila y de Guadalajara de México (1695–1712)*, Sevilla: Escuela de Estudios Hispano-Americanos.
- Russell, Camilla (2011), *Imaging the 'Indies': Italian Jesuit petitions for the overseas missions at the turn of the seventeenth century*, in PROSPERI, Adriano, *L'Europa divisa e I nuovi mondi*, vol. II, Pisa: Edizioni Normale.
- Spear, Richard L. (1975), *Diego Collado's Grammar of the Japanese Language*. Lawrence: Center for East Asian Studies, University of Kansas. Ebook. <http://www.gutenberg.org/files/21197/21197-h/21197-h.htm>
- 竹村覚 (1964) 『キリシタン遺物の研究』, 開文社.
- Tollini, Aldo (1982), Sidotti in Manila (1704–1708), *Philippiniana Sacra*, 17 (51), pp. 129–134.
- トルチヴィア・マリオ (2019) 「ジョヴァンニ・パッティスタ・シドティ」『キリシタン文化研究』29, 教文館.
- 豊島正之編 (2013) 『キリシタンと出版』 八木書店.
- Trigault, Nicolas (1624), *Histoire des martyrs du Japon*, Paris.
- Valentijn, François (1726), *Oud en Nieuw Oost-Indiën*, vol. V, parte II: *Beschryving Van 't Nederlandsch Comptoir op de Kust van Malabar, En van onzen Handel in Japan, Mitsgaders een Beschryving van Kaap der Goede Hoop. En 't Eyland Mauritius, Met de zaaken tot de voornoemde Ryken en Landen behoorende*. Dordrecht-Amsterdam: Joannes Van Braam, Dordrecht-Gerard Onder De Linden.
- ヴァリニャーノ・アレックスサンドロ (1995) 『日本巡察記』 松田毅一他訳, 東洋文庫229, 平凡社.

